

令和3年7月8日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080048

氏名 安藤 歴

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 1 派遣先: 都市名 ストラスブール (国名 フランス)
- 2 研究課題名 (和文) : ジャン＝リュック・ナンシーと政治的なものとの関係を中心に
- 3 派遣期間: 令和 3年 1月 7日～ 令和 3年 6月 8日 (152日間)
- 4 受入機関名・部局名: ストラスブール大学哲学部
- 5 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

私の研究は、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーの政治哲学の独自性を取り出すために、1970年代からフランスで行われた全体主義批判の流れにナンシーの共同体論を位置づけた上で、主権論、民主主義論を再構成することを試みている。このために、特にマルクス主義の影響に着目し、国家や社会関係、共同体を論点としながら議論を組み立て直すことで、当時の全体主義批判の政治社会的背景を踏まえつつナンシーの共同体論を精緻に分析できると考えている。

本派遣ではナンシーの政治的なものの概念を手掛かりとして研究を進めた。今回の研究滞在では1970年代から80年代前半までのマルクス主義をめぐるフランスでの政治的議論の展開のなかに彼の政治哲学を位置づけることに主眼を置いている。ここで着目されるのは、70年代中盤からフランスで盛んになされるようになった全体主義批判であり、ナンシーによる共同体論の問い直しが行われた背景にあるマルクス主義あるいは共産主義の問い直しの内実を検討した。

このために本派遣期間中にはフランスのいわゆる「ヌーヴォー・フィロゾフ」と呼ばれる一群の哲学者たちの著作を検討したとともに、『民主主義の発明』をはじめとするクロード・ルフォールの著作の読解を行った。フランスでは1970年代中盤から「ソルジェニーツィン事件」とも呼ばれるソ連の全体主義に対する告発に対して、全体主義や民主主義といった政治的概念を問い直す動きが進んでいった。この展開を追い、ナンシーが友人のフィリップ・ラクー＝ラバルトらとともに提起した「政治的なものの脱構築」というプロジェクトおよびナンシーの「無為の共同体」についての議論もその議

論の延長線上において行われたものとして捉え読解を進めた。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究滞在を通して私がより明確な理解に至ったのは、1970年代以降のフランスにおける政治思想、政治哲学の展開が1968年5月の経験をどう捉えるかをめぐって展開されていったことである。先行研究を読み進める中で、1968年の余波がフランスの左翼から右翼、保守層までの幅広い政治思想に影響を与えていること、その重要性に気づかされた。68年の出来事が全体主義批判、民主主義論の活性化からフランスの共和主義や自由主義の諸潮流の源泉となっており、本研究滞在が取り扱うマルクス主義、全体主義、民主主義をより広い文脈の中で包括して捉えなければならないと自覚した。この広範な諸影響のひとつとして「ヌーヴォー・フィロゾフ」の登場を捉え、彼らの思想やルフォールの政治哲学をたどり直し、ナンシーの政治哲学の問題意識を取り出す必要がある。

ここから次の2つの論点についてそれぞれ論文の執筆あるいは学会発表を行いまとめる必要がある。一つ目は70年代フランスにおける全体主義論および民主主義論の文脈を明確化することである。68年以後という時代性を踏まえ、特にルフォールの全体主義論と民主主義論の展開を「ヌーヴォー・フィロゾフ」との対抗的關係において、人権論を主題にしながら問題にしたい。二つ目はラク＝ラバルトとナンシーによる「政治的なものの脱構築」のプロジェクトの位置づけを行うことである。特にナンシーの企図が「労働」あるいは「産出」に基づく近代的政治プログラムの脱構築にあることを論点として、彼の著書『無為の共同体』における「主権」（および「人民」）の概念を解釈すること、その上でマルクス主義および共産主義の捉えなおしが問題として浮上していることを論じる必要がある。

以上の研究は未だ途上であるが、一定の区切りをつけて学会、研究会で発表し、今年度末までに論文としてまとめる予定である。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

フランスにおいて資料入手をする機会が持つことができたのは、研究の発展のために極めて重要であった。また、研究について重要な研究者から助言や指導を受けることは、自身の研究の具体的な方針を定める上で、有益であった。

ストラスブール大学哲学部教授のジャコブ・ロゴザンスキー氏のセミナーへ参加および研究についての相談を受けた。ロゴザンスキー氏は私の研究対象の時代及び場所で実際に研究を行っており、当時の状況を熟知しており、研究の方針や内容について様々な助言を得た。ストラスブール大学には2020年1月から2月にも訪問しており、ロゴザンスキー教授と研究交流を通して関係を強化することができた。

新型コロナウイルスの蔓延によって大学構内での授業が開講されておらず、オンラインでセミナーに参加していた。精神分析や現象学についての講義は他大学の教員と共同で行われており、フランス、イタリアの研究を知ることができる機会となった。ただ、残念であったのは全てがオンライン上でのやり取りであったため、受け入れ先の大学院生や教員と知り合う機会を得ることができなかったことだ。対面でセミナーを受けることができれば、ストラスブール大学所属の大学院生やその他研究者とより広い関係が作ることができていたと思われる。

資料入手については、70年代から80年代初頭までの雑誌資料の複写や入手を行った。日本では入手困難な資料を手に入れることができたため、今後の研究を進める上で有益であった。